

院長ノート

病院のホームページに掲載している畑山院長のエッセイです。
月に1回くらい、脳外科診療や日常生活で感じている想いを軽妙なタッチで書き連ねています。
ご興味ありましたらQRコードから過去の内容もご覧ください。



脳神経外科医
畑山 徹
(はたやま とおる)

1963年生まれ
青森で育ち、弘前大学を1988年に卒業
日立市の病院で河野拓司理事長に手術の
手ほどきを受け、東北各地で腕を磨いた
のち、2013年から当院に勤務
アメリカで三叉神経痛と顔面痙攣の治療
を学び、国内でも有数の実績を持つ
趣味は我流のピアノ
たまにライブハウスで演奏

2025年4月号



はた流コミュ術

第8条「指示ではなく助言」

当院でも、ミャンマーからの技能実習生がナースエイド(看護助手)としてテキパキ仕事をしてきています。
日本語の上達にも熱心で本当に感心しますが、私達が外国語を覚えるより相当大変なんじゃないかと想像
します。

例えば、「食べて」ひとつでもいろんな言い回しがあります。

食べてね、食べてよ、食べましょう、お食べ下さい…

使い分けは面倒でしょうが、うまく選ぶことで
微妙な感情が伝えられます。

アメリカでウェイトレスが「エンジョイ！」とだけ言って
料理を置いていくのとは大違いです(笑)。

ちょっと語尾を工夫すれば、優しさや思いやりも伝えられる…

そんな便利な言語だからこそ、医療の現場でも

うまく活用できればコミュニケーションの効率が高まります。



もともと医療は、病気を「治している」のではなく

「治るのを手伝っている」のだと思っています。

原因を調べ、症状を和らげ、病巣を減らそうとしますが、体を治しているのは本人の治癒力です。

その内なるパワーを高めてもらうには、指示するような伝え方より、助言を生かしてもらえるような勧め
の方が効果的だと感じています。

日本語ならではの敬語システムを使ってしっかりと配慮を示し、おだやかな言葉づかいで回復への見通し
をアドバイスする。

そんな風に受けとめやすい話し方ができれば、きっと治る気持ちも引き出しやすいんじゃないかと期待し
ています。

院長ノートはこちらから→

<https://mito-bhc.com/blog/blog.html>

